

横浜で世界トライアスロン大会が 開催されました

2015年5月16日土曜日の朝6時55分、雨が降っているなかで、世界トライアスロンシリーズ横浜大会のトライアスロン部が始まりました。パラトライアスロン部は、男女一緒に走っていました。トライアスロンは、1974年アメリカのカリフォルニア州サンディエゴで誕生しました。サンディエゴ・トラッククラブのメンバー達が、ラン（走る）4km、バイク（自転車こぎ）8km、スイム（泳ぐ）0.4km、ラン3.2km、スイム0.4kmで一番最初の「トライアスロン」大会を開きました。それがトライアスロンの始まりでした。

現在のトライアスロンの大会は、水泳（スイム）、自転車（バイク）、ランニング（ラン）の3種目を連続して行います。

パラトライアスロンでは障害の程度に区分けして、5つのカテゴリーに分かれています。



当日は、朝から雨が降っていたので取材をするのが大変でした。私が選手達の様子を見てみると、みんな真剣な顔をしていました。海沿いからの取材のときには、あまりにも海が汚くみえていたので、自分も選手だったら、それに耐えられるだろうか...と思ってしまうました。

選手はもちろん観戦者も水分補給が必要となりました。選手達は走りながら、水を飲んだり体にかけていたりしていました。

最後のエリート男子では、スイムスタートの時に海のすぐそばまで入って取材ができたので、わたしには前日までの台風で汚れてしまった海面が見えていましたが、そのような中でも選手達は、勢いよく次々と飛び込んでいきました。

みんな電光石火のごとく速く泳いでいました。海から出てバイクの時、選手達は猛スピードで自分の自転車の所へ走って行って、すばやく着替えて走りながら自転車に乗りました。ランの時、選手達は、真剣な顔でゴールを目指していました。この繰り返しで、みんな頑張っていました。



エリート男子スタートの飛び込んでいる様子 【撮影・樺本夕奈】

【樺本夕奈】

印象的だった真剣な表情



当日は、朝から雨が降っていたので取材をするのが大変でした。私が選手達の様子を見てみると、みんな真剣な顔をしていました。海沿いからの取材のときには、あまりにも海が汚くみえていたので、自分も選手だったら、それに耐えられるだろうか...と思ってしまうました。

視力障害のある選手は、取材の時にこちらに目を向けて笑顔で話してくれて、競技中サポーターのガイドさんがいるから、一緒にがんばれと話していました。足を失って義足で自転車こぎ選手、ふんばって歯を食いしばって走っていた選手。みんな、一生懸命でした。



インタビューを受けた佐藤圭一選手 【撮影・樺本夕奈】

私は、選手にインタビューできて、嬉しかったです。

こども記者 事業報告

今回、世界トライアスロンシリーズ横浜大会組織委員会と公益財団法人横浜市体育協会の連携、そして株式会社ニコンイメージングジャパン様のご協賛により、初めての試みとして「こども記者」を実施、小学5・6年生8人が集まりました。世界のトップアスリートが集う大会で、撮影・選手インタビュー取材を行い、この「こども新聞」を作成。

一眼レフカメラの使い方、実践の中でスポーツ写真の撮り方、取材についてのアドバイスをを行った事前ワークショップ（5月6日）、荒天の中、朝早くからの大会取材（5月16日）と自宅での原稿作成そして新聞づくりの事後ワークショップ（5月24日）。こどもたちにとって、大変ながらも充実したプログラムになりました。

「スポーツには、『する』『観る』『支える』のさまざまな楽しみ方がある」と言われますが、今回参加したこども記者のみなさんは、「伝える」という新たなスポーツとの関わり方を体験することができました。

大会スタッフやプロのカメラマン、そして上田藍選手にもお声かけいただきなど、特別な経験ができた今回のプログラムでした。
【横浜市体育協会・吉山博之】

2015 世界トライアスロンシリーズ横浜大会
キッズプロジェクト「こども記者」事業は、
株式会社ニコンイメージングジャパン様のご協賛により実施されました。

【協賛内容】

- ・こども記者および保護者・スタッフ1人につき1台のカメラの借用提供
- ・カメラの使い方説明とスポーツ写真撮影についてのワンポイントアドバイス、全活動日における運営協力

